

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 9 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26300012

研究課題名(和文) アフリカの少数民族による文化/自然の観光資源化と「住民参加」の新展開

研究課題名(英文) Reconsidering "Community-based Tourism" among ethnic minorities in Africa

研究代表者

丸山 淳子 (Maruyama, Junko)

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号：00444472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：アフリカにおいて、観光は最も急速に成長している産業であり、経済発展だけでなく、エンパワーメントや文化保全、環境保護などにも貢献すると期待されてきた。本研究では、アフリカ各地の住民参加型のエコツーリズムや民族文化観光をフィールドワークに基づいて検討した結果、観光は地域の問題解決に部分的に貢献しているが、観光客を受け入れる少数民族の側からみれば「万能薬」とはいいがたいことが明らかになった。むしろ少数民族は、主体的に観光に接続・離脱・再接続をする柔軟なかかわり方を維持することによって、観光をいわば「都合よく」使い、生活を構築していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In Africa, tourism is one of the fastest growing markets, and, there are high expectations that tourism can contribute not only to economic development, but also to empower marginalized populations, to preserve their cultural heritage and to conserve the environment. This research project, based on multiple years of ethnographic research, analyzes cases of community-based eco- and cultural-tourism that span East, Central and Southern Africa. In all cases, it is shown that while the tourism can help address some of the local challenges, from the vantage point of African participants, tourism might not be considered a panacea. African participants make pragmatic choices in respect to tourism, opting to move in and out of the sector based on their perceptions of the opportunities tourism gives. There is a marked degree of flexibility and fluidity in Africans' tourism participation in all the case studies, and this is mostly the result of individuals' agency.

研究分野：地域研究

キーワード：アフリカ 観光 住民参加 開発 自然保護 少数民族 文化 生活の場

### 1. 研究開始当初の背景

アフリカ観光は、従来、欧米の富裕層を対象に多国籍企業が管理運営する「サファリ(野生動物の鑑賞)」に限定されており、地域住民は「野生」の一部として動物と同様に鑑賞の対象となったり、逆に観光用に囲われた「自然」から排除されたりしてきた。また、雇用機会を得たとしても低賃金の労働部門に限られてきた。しかし近年、外国資本によるマス・ツーリズムが地域住民に経済的利益を創出せず、資本の流出や自然環境の破壊などの負の影響を及ぼしていることに批判が強まると、エコツーリズムやエスニック・ツーリズムといった新たな観光形態を求める動きが急速に広まった。すなわち、地域にとって搾取と破壊をもたらしてきた観光が、支援と保護をめざすものへと思想上の大転換をとげたのである。このことが、遠隔地に住み、資本をもたない少数民族(マイノリティ)が観光に主体的に関与することを可能にした。これまで政治・経済的に主流の活動から排除されてきた少数民族は、それが故に維持されてきた彼らの文化や居住域周辺の自然を観光資源としてとらえなおし、住民参加型観光(コミュニティ・ベースド・ツーリズム)の主体的な担い手として期待されるようになった。

住民参加型観光は国家経済の成長を推進する産業としてだけでなく、少数民族の貧困削減やエンパワーメント、国内の不平等を解消、自然資源や文化遺産の持続的な保全という多様な役割を担う、いわば「万能薬」とみなされている。一方で、研究代表者は、これまでの調査の過程で、少数民族が暮らす地域で展開される住民参加型の観光業が、民族間関係や自然利用の方法に多大な影響を与え、複雑な問題を生じさせていることも、見聞きしてきた。多国籍企業や政府観光局主導のトップダウン型「住民参加」によって、かえって少数民族の主体性が奪われる側面がある一方で、各地の少数民族がこれらの企業や政府組織を介することで、他民族との新たな関係や、超地域的なネットワークの形成なども見られる。

こうした現場の複雑なダイナミズムは、住民参加型観光を「万能薬」ととらえたり、その効果を「成功/失敗」の二元論で議論してきた従来のアプローチでは決して把握できない。住民参加型観光が一枚岩の「住民」によってではなく、立場や目的の異なる多様なアクターによって成立しているという事実への着目が欠かせないといえる。これまでの観光研究においてはアフリカを対象とした研究の蓄積は非常にうすく(Kasfir 1999, Bruner 2005)、とくに住民参加型観光に関する現場のスピーディな動きや地域社会に与えるインパクトに関する実証的研究はほとんどなされてこなかった。また観光する「外部者(ゲスト)」と観光される「地域住民(ホスト)」という二分法的な枠組みを前提に議論されてきた「観光のまなざし論」(アーリ 1989)や「文化の客体化論」(太田 1993)では、住民参加型観光にかかわる極めて多様な諸アクターの複雑なダイナミズムは十分に把握されてこなかった。

### 2. 研究の目的

こうした背景をふまえて、本研究は、地域社会の持続的開発のための「万能薬」として急速に普及している住民参加型観光が、アフリカ各地の少数民族の直面する問題解決にいかにか寄与し、一方で新たな問題を生じさせているのかを、地域間比較によって解明する。具体的には、文化/自然が観光資源化される過程とそこにかかわる多種多様なアクター間の関係を分析し、住民参加型観光の複雑で重層的なダイナミズムを明らかにする。また少数民族が、観光以外の生業・経済活動や地域開発プロジェクトなどの関係のなかで、いかに社会を再編しているのかに着目することによって、観光業からの離脱・再接続さえも可能な弾力性のある「住民参加型観光」の新たなあり方を提唱することを目指す。

### 3. 研究の方法

進展段階の異なる7つ少数民族の住民参加型観光を主たる調査対象として、各調査地における現地調査・複数調査地の調査結果・先行研究・統計文書資料など組み合わせた分析研究会や公開シンポジウムにおける知見の統合と議論を実施した。具体的には、ケニア、タンザニア、エチオピア、ガボン、ボツワナの5つの国における少数民族居住地において、文化/自然の観光資源化の過程と諸アクターの関係、観光と観光以外の生業や開発プロジェクトなどの関係の解明を共通の調査項目とし、研究期間中にも進行する観光業の新展開をとらえた。

また研究代表者が主導し、国内外で定期的に研究会やシンポジウムを開催し、個別地域の詳細な資料の比較検討、国家レベルの政策や産業動向および、地域や国家を超えたグローバルな観光ネットワークに関する資料と統合して分析した。これによってアフリカの住民参加型開発の全体像を把握が可能となった。またこれらの機会には、日本を含めた、アフリカ以外の地域における住民参加型観光に詳しい研究者や現場の専門家も招聘し、多角的にアフリカの観光現象の特殊性についても検討した。

### 4. 研究成果

本研究の研究成果は、研究代表者と分担者による個々の学会報告や論文として発表されただけでなく、全体としてまとめて、アフリカ学会でフォーラムの開催、南アフリカの観光教育施設における国際シンポジウムの開催、また学術誌「アフリカ研究」の特集号というかたちで公開された。

これらにおいて、本研究では一貫して、研究対象となったいずれの地域において、現在どのような観光が展開され、そこに暮らす人びとの「生活の場」とどのような形で、どの程度結び付いているのかを明らかにすることに力がいれられた。そして、そのうえで、各地域の人びとが観光に対してどのような態度や行動、戦略をとっているのかを検討された。

その結果、アフリカ各地の観光は、地域や事例ごとに、観光地としての発展度合いや観光形

態、住民/地域に影響を及ぼす主体ないし制度が異なり、極めて多様なかたちで営まれているが、とくに地域住民の観光への関わり方、観光対象の違いにより異同があることが明らかになった。今日のアフリカにおける地域住民の観光とのかかわり方は、次の二つに大別された。一つは、住民自身やその文化が観光対象となるものであり、もう一つは、主たる観光対象として野生動物や自然景観などがあり、住民はその管理や資源提供に関わるものである。前者は、民族観光(エスニック・ツーリズム)と呼ばれることが多いが、本特集では、住民自身が、観光対象を「文化(カルチャー)」と認識していることから、「民族文化観光」という表現することもできる。後者の場合は、エコツーリズムというかたちで住民がガイド役を担うばかりでなく、土地資源などを提供することで観光に関わるケースもある。いずれの場合も、住民が観光業の運営や企画に関与しており、彼らにとって観光はまずなによりも生計維持活動の一部として位置づけられているが、観光との関わり方の違いが、それぞれの地域で異なる展開を生んでいることにも注目した。

観光対象については、「アフリカの自然」として知られる野生動物や景観、あるいは「エキゾチックな文化」、さらには近年の注目の高い「社会問題」など、個々の事例で異なっているが、観光対象がいずれも典型的な「アフリカイメージ」と重なるという点では、共通性が現れた。観光客が期待する均質化された「アフリカイメージ」を提供するために、地域住民が繰り広げる工夫の一方で、それが生み出す齟齬や葛藤も大きなものであった。

また多くの事例研究を統合した結果、アフリカの住民参加型観光について明らかになったのは、辺境の少数民族であればなおさら、近年、その生活域で観光が活発化し、彼らの生活の一部として観光、あるいは観光への期待が組み込まれていることであった。観光は、もはや限られた有名な「観光地」だけでなく、それを含むアフリカのありとあらゆるところで見られる現象となっており、そこへの地域住民の参入も、かつてに比べてはるかに容易くなっている。少数民族は、大きな犠牲を払ったり特別な準備をしたりすることなく、むしろ日常生活の延長線上で観光へと関わり始めていることが解明された。

一方で、彼らは、いとも簡単に、そして頻繁に観光から離脱する。もともとアフリカの観光業は、頻発するテロや内戦、先進国の経済不安などの予測不可能な事態に大きく影響を受けるといった脆弱性をもっている。こうした大局的な状況の変化に加えて、個人の関心、生活や人間関係の変化に応じて、多くの人びとが、簡単に観光から離れて他の生業活動へと身を移し、そしてまた状況が変われば観光に再接続を試みる。このような観光との付き合い方は、一方では「持続性の低さ」として否定的に評価されがちだが、観光のもつ不安定な側面を考えれば、むしろ生計の安定に寄与しているともいえる。

こうした彼らの「軽やか」な観光との付き合い

方は、観光をアフリカの人びとの生活の「一部に過ぎない」とらえた本研究のアプローチによって、より鮮明に見えてきたといえる。そしてその「軽やかさ」は、観光こそが地域住民の問題を解決する万能薬となるという過度の期待も、地域住民はグローバルかつ複雑な観光産業とそれに伴う権力構造のなかで搾取される被害者であるという糾弾とも異なり、むしろそれによって明らかになるのは、少数民族らの主体的な観光とのかかわり方である。彼らは、観光のために既存の文化や知識を積極的に組み替え、それによって観光業から経済的な成功をおさめるといったような観光の場に限って見られる主体性をこえ、観光に接続・離脱・再接続をすることで、観光をいわば「都合よく」使い、生活を構築していた。

しかしながら一方で、高度に複合的な産業である観光に関わるアクターは多様であり、そのあいだには複雑な権力関係がみられる。そのなかで、少数民族が、とりわけ周辺化された立場に置かれやすいのは事実である。観光から得られる一時的な利益と引き換えに生業基盤を喪失したり、あるいは観光に強く依存せざるを得ない状況が生じれば、彼らが「軽やかさ」を維持することは厳しくなるだろう。本研究では、観光に対する主体性が、常に崩壊の危険性を孕んでいること、地域によってはそれが実際に進行していることも示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計34件)

丸山淳子・目黒紀夫、アフリカにおける「住民参加型観光」の再検討 地域社会の視点から、アフリカ研究、査読有、92巻、2017、pp. 19-25 DOI:なし

丸山淳子、ボツワナ中西部における「ブッシュマン観光」の成立と展開:観光と地域の社会関係のダイナミズム、アフリカ研究、査読有、92巻、2017、pp.55-68 DOI:なし

西崎伸子、エチオピア西南部における民族文化観光の展開 新規参入のアクターに着目して、アフリカ研究、査読有、92巻、2017、pp. 43-54 DOI:なし

MEGURO, Toshio、Gaps between the Innovativeness of the Maasai Olympics and the Positionings of Maasai Warriors、Nilo-Ethiopian Studies、査読有、22巻、2017、pp. 27-39 DOI:なし

目黒紀夫、「万能薬」ではなく「サプリ」としてケニア南部に暮らすマサイにとっての観光の意味、アフリカ研究、査読有、92巻、2017、pp. 83-94 DOI:なし

岩井雪乃、奪われる住民の観光便益 タンザニア・ワイルドライフ・マネジメントエリアの裏切り、アフリカ研究、査読有、92巻、2017、pp. 95-108 DOI:なし

岩井雪乃、政治化された「野生」- 地域社会はグローバル化した野生動物といかにかわれるか -、環境社会学研究、査読有、

- 23 卷、2017、pp. 34-52 DOI:なし  
中村香子、「伝統」を見せ物に「苦境」で稼ぐ「マサイ」民族文化観光の新たな展開、アフリカ研究、査読有、92 巻、2017、pp. 69-81 DOI:なし  
八塚春名、タンザニアにおける狩猟採集民ハッザの観光実践 民族間関係、個人の移動、収入の個人差に着目して、アフリカ研究、査読有、92 巻、2017、pp. 27-41 DOI:なし  
松浦直毅・安藤智恵子・新谷雅徳・竹ノ下祐二、科学研究プロジェクトと地域社会を架橋するエコツーリズム ガボン、ムカラバ・ドゥドゥ国立公園における取り組み、アフリカ研究、査読有、92 巻、2017、pp. 109-121 DOI:なし  
中村香子、「ケニアの牧畜民サンプルのガラスビーズ 母から娘へと受け継がれる恋人からの贈り物」、月刊みんぱく、査読無、41(3)巻、2017、pp.9 DOI:なし  
Matsuura, Naoki、Humanitarian assistance from the viewpoint of hunter-gatherer studies: Case of central African forest foragers、African Study Monographs Supplementary Issue、査読有、53 巻、2017、pp. 117-129 DOI:10.14989/218911  
Matsuura, Naoki、Dynamics of social changes and relationships with neighbors among African huntergatherers: A case of the Babongo in southern Gabon from 2003 to 2012、Senri Ethnological Studies、査読有、94 巻、2016、pp.203-226 DOI:なし  
Yatsuka, Haruna、Historical Interaction with Neighbors from the View of Livelihood Change: A Study of the Sandawe of Tanzania、Senri Ethnological Studies、査読有、94 巻、2016、pp. 81-105 DOI:なし  
Maruyama, Junko、Contemporary Dynamics of Residential Practice and Social Relationships among the G<sub>1</sub>ui and G<sub>1</sub>ana San、African study monographs. Supplementary issue、査読有、52 巻、2016、pp. 171-187 DOI:10.14989/207688  
Maruyama, Junko、Global Indigenous Rights Movement and Daily-life Coping Strategies among the Hunting and Gathering Societies in Africa and Australasia、Africa and Asia: Entanglements in Past and Present. (Mine, Y. and S. Cornelissen eds.)GRM Program Doshisha University、査読無、2015、pp. 87-102 DOI:なし  
Maruyama, Junko and Michaela Pelican、Introduction to the Special Topic: Indigenous Identities and Ethnic Coexistence in Africa、African Study Monographs、査読有、36-1 巻、2015、pp.1-3 DOI:なし  
Pelican, Michaela and Junko Maruyama、The Indigenous Rights Movement in Africa: Perspectives: From Botswana and Cameroon、African Study Monographs、査読有、36-1 巻、2015、pp. 49-74 DOI:なし  
中村香子、「コントラスト」を演出する ケニアの牧畜民サンプルの美意識とビーズ装飾、フィールドプラス、査読無、7(14)巻、2015、pp. 30-31 DOI:なし  
Matsuura, Naoki and Moussavou, G.M.、Analysis of Local Livelihoods around Moukalaba-Doudou National Park in Gabon、Tropics、査読有、23(4) 巻、2015、pp. 195-204  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/tropics/23/4/23\\_195/article](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tropics/23/4/23_195/article)  
21 Matsuura, Naoki、The roles of local associations in rainforest conservation and local development in the Democratic Republic of the Congo、African Study Monographs Supplementary Issue、査読有、51 巻、2015、pp. 57-73 DOI:なし  
22 Matsuura, Naoki、Human female dispersal and social organization: A case of central African hunter-gatherers、Dispersing Primate Females Life History and Social Strategies in Male-Philopatric Species (Furuichi, T., J. Yamagiwa, and F. Aureli eds.) Springer、査読無、2015、pp. 165-183 DOI:なし  
23 Haruna Yatsuka、Reconsidering the "Indigenous Peoples" in the African Context from the Perspective of Current Livelihood and its Historical Changes: the Case of the Sandawe and the Hadza in Tanzania、African Study Monographs、査読有、36(1)巻、2015、pp. 27-48 DOI:なし  
24 目黒紀夫、野生動物保全が取り込まれる土地における紛争と権威の所在 ケニア南部のマサイランドにおける所有形態の異なる複数事例の比較、アジア・アフリカ地域研究、査読有、14(2)巻、2015、pp. 210-243 DOI:なし  
25 岩井雪乃、象牙密猟は生息地でどう受けとめられているか？—二重に苦しめられるタンザニアの地域住民、ワイルドライフフォーラム、査読無、20-1 巻、2015、pp. 6-8 DOI:なし  
26 松浦直毅、「住民参加」によるアフリカ熱帯雨林の保全と開発に向けて ガボン南西部ムカラバ・ドゥドゥ国立公園の事例から、アフリカレポート、査読有、52 巻、2014、pp.88-97 DOI:なし  
27 Meguro, Toshio、Becoming conservationists, concealing victims: Conflict and positionings of Maasai, regarding wildlife conservation in Kenya、African Study Monographs Supplementary Issue、査読有、50 巻、2014、pp. 155-172 DOI:なし  
28 Nishizaki, Nobuko、"Neoliberal Conservation" in Ethiopia: An analysis of current conflict in and around protected

areas and their resolution, African study monographs, supplementary issue, 査読有、50 巻、2014、pp.191-205 DOI:なし

[学会発表] (計 76 件)

中村香子、'マサイ'をめぐる表象の重層性 ケニアの牧畜民サンプルの'民族衣装'の新展開、日本文化人類学会第 51 回研究大会、分科会: <少数者表象のポリティクス 展示、衣装、観光、芸術の文脈に現れる'もの'から>、2017 年

Iwai Yukino、Continuous Land Loss: Wildlife Management Area in Tanzania as Green Grab, "France-Japan Area Studies Forum: Voices for The Future: African Area Studies in a Globalizing World" (国際学会)、2017 年

丸山淳子、ボツワナにおける'ブッシュマン観光'の成立とその展開、日本アフリカ学会第 54 回学術大会、2017 年

中村香子、民族アイデンティティを加工して売る: 'マサイ'のみやげもの、2016 年度 JCAS 次世代ワークショップ'伝統文化とグローバルな観光現象のせめぎあい: みやげものを巡る政治・文化・ものがたり'、2017 年 02 月 11 日、京都大学

Nishizaki, Nobuko、Ethnic Tourism in Ethiopia、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khwa ttu, Cape Town, South Africa

Maruyama, Junko、"Bushman Tourism" in Botswana、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khuwa ttu, Cape Town, South Africa.

Nakamura, Kyoko、Life story as a tourism commodity in Kenya、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khwa ttu, Cape Town, South Africa

Nakamura, Kyoko、Ethnic tourism as a stage for 'attraction' and 'aid': A case study on the Kenyan 'Maasai' people、'アフリカ研究セミナー'(韓国外国語大学校アフリカ研究所・日本アフリカ学会・龍谷大学社会科学研究所共催)(招待講演)(国際学会)、2017 年 03 月 23 日、Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea  
Matsuura, Naoki、Ecotourism development in Gabon、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khwa ttu, Cape Town, South Africa

Iwai, Yukino、Wild life Management Area in Tanzania、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khwa ttu, Cape Town, South Africa

Yatsuka, Haruna、Hunter-Gatherers

Tourism in Tanzania、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khwa ttu, Cape Town, South Africa

Meguro, Toshio、Tourism Enterprise in Kenya、Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)、2017 年 03 月 07 日、!Khwa ttu, Cape Town, South Africa

西崎伸子、エチオピア西南部の大規模開発における民族文化観光の意義: 農村民アリによる文化の観光資源化のプロセスに着目して、日本アフリカ学会第 53 回学術フォーラム、2016 年 06 月 04 日、日本大学  
丸山淳子、岩井雪乃、アフリカの少数民族による文化/自然の観光資源化と'住民参加'の新展開、日本アフリカ学会第 53 回学術大会、2016 年 06 月 04 日、日本大学  
目黒紀夫、ケニア南部マサイランドにおける新展開 '観光保全事業'をめぐる議論と実際、日本アフリカ学会第 53 回学術大会、2016 年 06 月 04 日、日本大学

松浦直毅、住民参加によるエコツーリズム開発を目指して ガボン、ムカラバ・ドゥドゥ国立公園の事例、日本アフリカ学会第 52 回学術大会、2016 年 06 月 04 日、日本大学

八塚春名、気乗り薄なホスト タンザニア、狩猟採集民ハツァによる民族文化観光、日本アフリカ学会第 53 回学術大会、2016 年 06 月 03 日~2016 年 06 月 04 日、日本大学

中村香子、'伝統'を見せものに'苦境'で稼ぐ: ケニア民族文化観光村の事例から、日本アフリカ学会第 53 回学術大会、2016 年 06 月 04 日~2016 年 06 月 05 日、日本大学  
㊸中村香子、'観光'と'支援'の結節点としての民族文化観光: ケニア牧畜民による'苦境'の'演出'、観光学術学会第 5 回大会、2016 年 07 月 09 日~2016 年 07 月 10 日、立命館大学

八塚春名、'気乗り薄な態度'が維持するホストの生活 タンザニア、狩猟採集民ハツァの民族文化観光、観光学術学会第 5 回大会、2016 年 07 月 09 日~2016 年 07 月 10 日、立命館大学

目黒紀夫、'援助'としての観光開発 '野生の王国'に暮らすマサイにとっての観光業、観光学術学会第 5 回大会、2016 年 11 月 06 日、立命館大学

21 西崎伸子、エチオピア西南部の農耕民アリによる文化の観光資源化の試み、日本ナイルエチオピア学会第 24 回大会、2015 年 04 月 18 日~2015 年 04 月 19 日、藤女子大学

22 中村香子、'マサイの戦士'の戦略 ケニア民族文化観光とのつきあい方、観光学術学会第 4 回大会、2015 年 07 月 04 日~2015 年 07 月 05 日、阪南大学

23 岩井雪乃、'コミュニティ・ツーリズム'の裏切りータンザニア野生動物観光への住民

の抵抗、観光学術学会第4回大会、2015年07月04日～2015年07月05日、阪南大学

- 24 Nishizaki, Nobuko, Dynamics of Community-based Cultural tourism in southwestern Ethiopia, International Conference of Ethiopian Studies(ICES)(国際学会)、2015年08月24日～28日、Warszawa, Poland

(図書)(計29件)

深山直子・丸山淳子・木村真希子編、昭和堂、『先住民からみる現代世界:わたしたちのあたりまえに挑む』、2018、全288頁  
白石壮一郎、椎野若菜、目黒紀夫、村尾るみこ、清水貴夫、横田祥子、福島万紀、碓陽子、丸山淳子、白波瀬達也、川端浩平、安岡健一、古今書院、FENICS100万人のフィールドワーカーシリーズ7 社会問題と出会う、2017、216

岩井雪乃、合同出版、『ぼくの村がゾウに襲われるわけ。-野生動物と共存するってどんなこと?』、2017、全136頁

松浦直毅、東京大学出版会、『植民地時代のピグミー』池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史 自然・隣人・文明との共生』、2017、pp.217-222

八塚春名、東京大学出版会、『狩猟採集から複合生業へ タンザニアのサンダウエ社会における農耕と家畜飼養の展開』池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史 自然・隣人・文明との共生』、2017、pp.169-174

丸山淳子、臨川書店、『誰と分かちあうのか:サンの食物分配にみられる変化と連続性』岸上伸啓編『贈与論再考』、2016、pp.184-208

丸山淳子、世界思想社、『それぞれの「生きていくためのやり方」:現代のカラハリ狩猟採集社会において働くということ』(中谷文美・宇田川妙子編)『仕事の人類学 労働中心主義の向こうへ』、2016、pp.151-176

西崎伸子、京都大学学術出版会、『新自由主義的保全アプローチと住民参加 エチオピアの野生動物保護区と地域住民間の対立回避の技法』(山越言、目黒紀夫、佐藤哲編)『アフリカ潜在力5 自然は誰のものか 住民参加型保全の逆説を乗り越える』、2016、pp.211-243

八塚春名、京都大学学術出版会、『外生の変容をかわす生業戦略の柔軟性 タンザニアの狩猟採集民と多民族国家』高橋基樹・大山修一編『アフリカ潜在力3 開発と共生のはざままで 国家と市場の変動を生きる』、2016、pp.277-308

岩井雪乃、京都大学学術出版会、『豊かなゆえに奪われる野生動物 タンザニアにおける住民参加型自然保護』(山越言、目

黒紀夫、佐藤哲編)『アフリカ潜在力5 自然は誰のものか 住民参加型保全の逆説を乗り越える』、2016、pp.109-144

松浦直毅、京都大学学術出版会、『アフリカ熱帯雨林における文化多様性と参加型保全 ふたつの自然保護区における地域社会の比較から』(山越言、目黒紀夫、佐藤哲編)『アフリカ潜在力5 自然は誰のものか 住民参加型保全の逆説を乗り越える』、2016、pp.145-166

目黒紀夫、京都大学学術出版会、『マサイ・オリンピックの先には何がある? ケニア南部における『コミュニティ主体の保全』の半世紀』(山越言、目黒紀夫、佐藤哲編)『アフリカ潜在力5 自然は誰のものか 住民参加型保全の逆説を乗り越える』、2016、pp.253-291

中村香子、晃洋書房、『スルメイが手にした選択肢 -ケニア・サンプル女性のライフコースの変容-』落合雄彦編『アフリカの女性とプロダクション』、2016、pp.75-106

目黒紀夫、新泉社、さまよえる「共存」とマサイ ケニアの野生動物保全の現場から、2014、pp.456

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

丸山淳子(MARUYAMA, Junko)

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号:00444472

### (2)研究分担者

西崎伸子(NISHIZAKI, Nobuko)

福島大学・行政政策学類・教授

研究者番号:40431647

八塚春名(YATSUZUKA, Haruna)

日本大学・国際関係学部・助教

研究者番号:40596441

中村 香子(NAKAMURA, Kyoko)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・研究員

研究者番号:60467420

松浦 直毅(MATSUURA, Naoki)

静岡県立大学・国際関係学部・助教

研究者番号:60527894

岩井 雪乃(IWAI, Yukino)

早稲田大学・平山郁夫記念ボランティアセンター・准教授

研究者番号:80507096

目黒 紀夫(MEGURO, Toshio)

広島市立大学・国際学部・講師

研究者番号:90735656